



渋澤 健

シブサワ・アンド・カンパニー

しぶさわ・けん

1961年生まれ。小学2年時に渡米。テキサス大学卒業後、(財)日本国際交流センター入社。UCLA経営大学院にてMBAを取得。JPMorgan、Goldman Sachs、Moore Capitalなどを経て2001年シブサワ・アンド・カンパニー株式会社設立。渋沢栄一記念財団理事。経済同友会幹事。

一見釣り合わないように見える
道徳と経済の一致を説いた
明治の実業家・渋沢栄一。
100年前に説かれた
栄一の言葉を、
その5代目の末裔・健氏が
現代に紐解く。

「事業に対する時には、利にせよとせざる、義にせよとせざるようにせよとせざる。」

時代を超える普遍的なメッセージ

私が初めて渋沢栄一の「論語と算盤」―経済道徳同一説に触れたのは40歳の頃、外資の金融会社を辞めて独立しようとしていた時期です。もちろん私も渋沢家の人間ですから、渋沢栄一のエピソードなどは幼い頃から耳にして育ちましたが、改めてその思想を勉強しようと思ったのは、自分で事業を起さそうと考えるようになってからです。500社もの会社を興した人ですし、何かヒントになるものがあるのではないかと考えたのがきっかけでした。

そこで目にしたのが、「青淵百話」の中にある「元氣振興の急務」という文章です。大正の頃に書かれた文なのに、現代の日本を知って書いているのでは

ないか、と思うくらい今の状況にも当てはまるんです。要約すると「今の日本人は40〜50年前、明治維新の頃の日本人に比べると元気がなくなつて、諸般の発達すべき事柄が著しく停滞している。ことなかれ主義になつていゝ」と言っているんですね。「明治維新後50年」のところを「戦後50年」とすると驚くほど今の状況と似ている。

言うまでもないことですが、明治維新というのは大きな変革の時代で、一般市民が国政に参加できるようになつたり、民衆がエンパワーメントされた時代です。それに対して、この文章が書かれた大正というのは「大正デモクラシー」という言葉に象徴されるように、日本社会の近代化が進み、生活は豊かにはなつたけれども民衆の元気はなくなつた

といわれていた。そしてそれに続く昭和の初期はご存知のように戦争へとひた走って行った時代です。これを平成の日本に当てはめてみると、高度経済成長やバブル経済を経て、豊かさは手にしたけれども社会全体に元気がなくなっている。小さな政府といわれているけれども、税金は高くなり隣国との関係も悪化している。驚くほど当時の状況と通じるもの

「Good To Great」飛躍の法則と「智」「情」「意」



はないかと私は思っています。

「智」「情」「意」のバランスが大切

渋沢栄一の言葉の中で私が一番気に入っているのは、「常識」について語った部分です。渋沢栄一は常識というのは、「智」「情」「意」の3つのバランスが取れた状態だと述べています。私たちが「あの人は常識がない」という時というのは、「この『智』の部分、つまり知識がないな」という意味で用いることが多いと思うのですが、渋沢栄一は感情や意志といったものまで含めて、一人ひとりの中でバランスが取れていることが大切だといっているんです。つまり個人一人ひとりが自分自身の常識を持てるという事です。

個人が常識を持っていれば、それが社会の常識になる。そして、そうした社会には支配者はいない、と渋沢栄一は続けています。でも、実際は自分の中でさえ、情が強くなって感情的になっている日があったり、意が弱くなって怠けてしまう日があったりする

がありませんか。

同じ文章の中で渋沢栄一は「ともすれば政府万能主義を叫び、何事も政府に依頼せんとするの風がある」とも言っているのですが、これもバブル崩壊後の不景気のなかで政府の金融政策に頼ろうとする今の日本のことを書いているのではないかと思うくらいです。

当時のそのような状況に対して、渋沢栄一は「実業家はもちろん、一般国民も元氣振興に力を用いて国家を発展させなければならぬ」「これまでにやって来たことを大切に守っているだけではなく、さらに発展して世界列強と競争しなければならぬ」と言っているのです。これも現代に通じるメッセージだと思えます。原文は古くさい文章ではありませんが、そこに書かれている内容は決して過去の遺産ではなく、現代でも十分に通用する普遍的なメッセージが含まれていると思います。

全ての人が渋沢栄一のようにになれるわけではありませんが、一人ひとりが自分のレベルで社会に対してできることをする、それが「道徳」というもので

わけですから、難しいですよね。

アメリカでは結構有名な経営学者の Jim Collins という人がいるんですが、その人が書いた「Good To Great」(邦題「ビジョナリー・カンパニー2」)という本があります。その中で偉大(Great)な会社に共通する要素として「何が経済エンジンか」「何に情熱を持つか」「何に世界一になれるか」の3つを挙げています。これは、栄一の「智」「情」「意」の考え方に非常によく似ている。渋沢栄一は思想は、時代や洋の東西を問わず、通用する普遍的なものを持っていると感じる理由です。

「王道」を持ったリーダーが待望される

渋沢栄一の言葉で「現代における事業界の傾向を見るに悪徳の重役が出て多数株主より委託された資産を自己専有のものごとく心得、それを自分のために使って私利を営まんとする者がある」というものがあるのですが、これもまるで現代のことを指しているようですね。西武鉄道グループなどの事件は、

まさにこの言葉どおりのものでした。この言葉は「そのため会社の内部は一つの伏せる魔の殿と化し去り、公私の区別もなく秘密的行動が盛んに行われる」と続くのですが、こちらも耐震強度の偽装事件などに当てはまりそうです。

ただ、世沢栄一は評論家でも学者でもない実業家ですから、どれだけの利益を得たかというような情報は何でもすべて公開する必要はないと言っています。もちろん「あるものを無いといい無いものがある」というような純然たる嘘をつくのはよろしく無い」は根源であります。

ライブドアの事件なども、世沢栄一ならどのように評価していただろうと考えるのですが、昨年のフジテレビとの争議があった当時であれば既存勢力に対するチャレンジャーということで、堀江さんの方を応援していたのではないかと思います。ただ、今回このような刑事事件にまで発展してしまい、結果的に彼を応援していた人や、彼をモデルとしていた若い人たちを裏切るかたちになってしまったのは非常に残念なことですね。

か。「王道」というのは「カリスマ」や「セレブ」より重みのある言葉だと思います。「芯の通っている人」といいますが、「常識」のところでも触れたようにバランスの取れている人でもあると思います。「バランスが取れているが、通すところは通す人」と言えはいいでしょうか。やはりメディアに出る人たちは若い人たちのロールモデルにもなるわけですから、こうした「王道」を持った人たちがもっと活躍してほしいと思います。

「その富の作り上げる根源は何か」と仁義道徳、正しい道理の富でなければその富を永続することができない」と栄一は言っています。つまり、「論語と算盤」とは永続性のことを訴えているんですね。

資本主義の原典としては、「神の見えざる手」をうたったアダム・スミスの『国富論』が有名ですが、彼も元は道徳哲学の教授でした。資本主義的な競争の前提として、競争の主体となる資本家はある程度の道徳を持っていると考えていたのではないかと私は思います。まさに、世沢栄一の「論語と算盤」の思想は西洋にも通じる考え方なのです。

世沢栄一は利益を追求することは悪いことであるとは言っていないません。それを独り占めしようとすることは良くないと言っています。事業に対する時には、利にさとらず、義にさとるようになっている」としてはいますが、「多数の人より資本を集めねばならず、資本を寄せ集めるには、事業より利益の争がするようにせねばならぬ」と、利益を追求することは大切だと書いています。「利益を度外におくことを許さぬは勿論である」とも述べています。

最近、世沢栄一の言葉で気に入っているのは「ただ王道あるのみ」という言葉です。「社会問題とか労働問題のごときは、たんに法律の力ばかりをもって解決されるものではない」として「富豪も貧民も王道をもって立ち、王道すなわち人間行為の定規であるという考をもって世に処すならば、百の法文も千の規則あるよりも遙かに勝った事と思う」と述べている言葉です。

最近メディアでは「カリスマ」とか「ビジネス・セレブ」と呼ばれる人たちがもてはやされていますが、「王道」を持っている人たちがどれだけいるの

環境にやさしい取組みをしている グリーン経営認証事業者を利用しましょう

国土交通省も推進
運輸部門の

グリーン 経営認証

トラック、バス、タクシー、
倉庫、港湾運送、内航海運、
旅客船の各事業毎に認証



グリーン経営を実践する
事業者のメリット

■エコドライブによる
燃料費削減と事故の減少

■職場の活性化と
従業員の士気向上

■顧客からの評価向上

交通エコロジー・モビリティ財団

(略称：交通エコモ財団)

〒102-0078

東京都千代田区五番町10番地(五番町KUIビル3階)

TEL:03-3221-7636

http://www.ecomo.or.jp

「環境にやさしい取組みをしている運輸事業者」を認証する制度がグリーン経営認証。国土交通省及び各業界団体の協力を得てエコモ財団が推進しています。グリーン経営は、運輸部門の各事業に特化しており、環境保全の効果が期待でき、中小規模の事業者も容易に推進できるものです。

すでに2400を超える事業者が認証を取得し、今後も拡大が期待されています。

波澤 健

"good"ではなく
"great"を目指そう

ソフィア・アンド・カンパニー

Book Guide



「生命の暗号」

村上和雄
サンマーク出版

生物学者は、生命は矛盾だらけだと言います。そもそも、生命に死があること自体が最大の矛盾でしょう。でも矛盾から創造が生まれるというあるデザイナーの指摘は印象的でした。著者の村上先生はこの矛盾を「ムダ」という言葉を使って説明しています。一人ひとりの人間の差異は、遺伝子があるかないかではなくて、その遺伝子がオンになっているのか、オフになっているか、で出てくるということです。オン・オフのスイッチを入れるのは、周りの環境だ、と。先生は遺伝子のはほとんどがオフ状態で「ムダ」とご指摘されます。でもこのムダには、これからの進化の可能性などを秘めており意味のあるものではないかとおっしゃいます。これだけDNAが解読できるようになっても分からないのは、「じゃあ、これを誰が書いたのか」ということ。ビジネスパーソンにお勧めの一冊です。



「ビジュナリー・カンパニー2」(原題: Good to Great)

ジム・コリンズ
●日経BP出版センター

「ビジュナリー・カンパニー」の著者が書いた第二弾。冒頭に、世の中にGreatな企業が少ないのは、多くの企業がGoodな企業を目指しているからだとのメッセージがあります。確かに、子どもの頃、母親から「よい子」になりなさいとは言われてきましたが、「偉大な子」になりなさいとは言われませんでした。偉大な会社の経営者は、何が経済エンジンか、何に情熱をそそぐのか、何で世界一になれるか、この3つを知っていると書かれています。



「デザインの愛茶羅」

黒川雅之
●求道堂

デザインの深層に関わる50のキーワードがのっています。デザインというのは、機能するのは当たり前、何もしないときにいかに美しくあることができるかというメッセージがおもしろいなあと思いつきに取りました。順番に読むのではなく、関連するキーワードから好きなページに飛んでいけるという作りになっていて、インターネットでサーチしている感覚です。この本自体が、一つの新しいデザインの読みだといえます。



「自分であり続けるために」

田坂広志
●PHP研究所

著者はソフィアバンクの代表者ですが、現代日本の哲学者、詩人ともいえる方です。「風のたより」というメールマガジンを発行しています。仕事と仕事の合間に送られてくる。たった15分くらいの文章がひとつひとつ心に染みて素晴らしい。私もこんな風に文章を書けたらいいなあと思います。



良識ある社会人になるための本紹介

これからのビジネスパーソンに求められるのはスキルだけではない。
社会からも会社からも必要とされる人になるために
ぜひ読んでおきたい本をプロに選んでもらう。

